

# 総合問題 (日本文) 早稲田大学 政治経済学部 1/4

## <総括>

試験時間 120分

課題文から図表が姿を消した昨年度とは異なり、課題文と図表について問う設問が復活した。ただし、一昨年度の本試、2020年3月のサンプルの英文問題、7月のサンプルの日本文問題と比べると図表の数は大幅に減少し、その内容もシンプルなものとなった。設問では選択問題に加え説明問題が出題されている。選択問題は図表と課題文を読み、その内容を正確に読み取り、推論すれば解けるものとなっている。

## <本文分析>

大問番号	I
出典 (作者)	問題文A 橋本健二『新・日本の階級社会』講談社現代新書、2018年 問題文B ジャン・ティロール(村井章子訳)『良き社会のための経済学』日本経済新聞出版社、2018年
頻出度合 ・的中等	データ分析の問題として頻出の格差社会論である。
分量	時間に照らして妥当な分量。配点は100点満点中45点。
難易	易化・やや易化・ <u>変化なし</u> ・やや難化・難化

# 総合問題 (日本文) 早稲田大学 政治経済学部 2/4

## <大問分析>

大問	ジャンル	設問	設問形式	難易度	コメント (設問内容・答案作成上のポイントなど)
I	格差と自己責任	1	マーク	標準	空欄補充。①に最もよくあてはまる選択肢を選ぶ。データが1975年、1995年、2015年のものであり、40年間の時間の幅があることからふさわしいものを選ばばよい。
		2	マーク	標準	空欄補充。(a)～(d)のヒストグラムのうち貧困層が多い順に並んでいる選択肢を選ぶ。課題文における貧困層の定義をふまえて、それぞれのヒストグラムにおいて貧困層の数がどれだけになるか計算を行えばよい。
		3	マーク	易	空欄補充。②に入る最も適切な選択肢を選ぶ。直前の文章に着目すればよい。
		4	マーク	標準	問題文Aの下線部(2)にある、格差拡大を肯定・容認する傾向と自己責任論の関わりについて、本文中の図3、4、5で示されているデータからは判断できないものを、選択肢からすべて選ぶ。エビデンスが示されているかどうかで判断する。
		5	マーク	標準	問題文Aの記述と問題文Bの記述を比較し、後者のみで述べられている事柄として適切な選択肢を二つ選ぶ。
		6	論述	標準	問題文Aの下線部(3)「すべて自己責任と片付ける論調が少なくない」理由について、問題文Bの記述に基づいて説明する。情報不足が原因であることに着目する。
		7	論述	標準	問題文A・Bの記述を踏まえて、所得格差における自己責任論の功と罪について200字以内で説明する。問題文から功と罪にあたる部分をそれぞれ抜き出して、自分なりにまとめればよい。

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

## <学習対策>

大学側がどういう問題を出題すべきかまだ試行錯誤しているようだ。それゆえ、出題者側の明確な方針が定まっていないことを前提とした対策が必要である。

一昨年度は、2020年3月の英語のサンプル問題や7月の日本語のサンプル問題と同様に多くの図表を掲載し、それに関して説明する課題文となっていた。昨年度は、200字の論述を除くと、2020年3月の日本語のサンプル問題に近いものとなった。本年度は図表が復活したものの、その数は少なくなり、図表それ自体も読みやすいものになった。細かく見ないといけない表や散布図などは姿を消している。前提とされるデータ分析の知識のレベルも標準的なものとなっている。ただ、2022年度の高校1年生からデータ分析や思考力を重視した新カリキュラムが始まっていることもあり、データサイエンス的要素が強まることが予想される。それゆえ、高2生や高1生は現在数学や情報Iで学んでいるデータ分析の範囲をしっかりと学ぶこととしよう。

とはいえ、今後どのパターンで出題するのか決めつけない方がよいだろう。いずれのパターンでも対応できる準備が必要だ。複数の課題文を課す共通テスト型の現代文や数学のデータ分析を対策するとともに、推論型や意見論述型の小論文対策をしておく必要がある。政治経済学部で学ぶことになる政治経済学の基本的なテーマに関しても理解をしておきたい。

<全体分析>

試験時間 120分

解答形式

マーク式と記述式の併用。

分量・難易 (前年比較)

分量 (減少・やや減少・変化なし・やや増加・増加)

難易 (易化・やや易化・変化なし・やや難化・難化)

2023年度は1,798 words で、2022年度の1,382 words よりも約400 words 長くなった。

出題の特徴

- ・大問Ⅱの英文は2019年2月27日のネット記事を出典としていた。従来型の投票方式では民意が正しく反映されないものとして majority judgement という投票方式を紹介する英文となっていた。この社会的選択理論は政治学的に比較的新しい考え方である。
- ・出題された「文整序」「連立型の適語補充」「要旨選択」等は、新テストになる前から政治経済学部の定番的な問題である。新テスト1年目(2021年度)の問題にも多く見られた設問形式である。
- ・2022年度同様に、本文から派生する数学的思考を要する問題が3題(問3、問7、問8)出題されて、そのうち1題は日本語による記述問題が含まれていた。MJ (majority judgement) における majority grade の算出方法や、その majority grade が同じだった場合に用いる gauge の算出方法などを、具体例を用いて説明されている箇所から正しく読み取らねばならなかった。これらは読解問題というより、試験時間内に情報整理や簡単な計算など、主に作業をさせる設問である。新傾向の問題と言えらるが、多くの大学で出題され始めた「情報の処理能力」を問うタイプの問題である。
- ・大問Ⅲは与えられたテーマについての賛否を論じる自由英作文で、本学部では2009年度以降出題され続けている。「総合問題」として3年目になる2023年度は、これまでの社会学的テーマと言うより人文学的な要素も含まれる出題となっていた。

その他トピックス

- ・2022年度の大問Ⅱの問5には、本文から派生する問題ながら、必ずしも本文の理解を特別必要としない独立した問題が出題された。2023年度の大問Ⅱの問8にも同様に長文から独立したものが出題されていたが、本文の英文内容 (grade と gauge の「算出方法」についての内容) の理解がベースになる問題であるので、2022年度のものともまた異なる形式の出題だったと言える。
- ・第3段落最終文の a more or less a clear meaning は原文通りではあるが、英語としては a more or less clear meaning とするのが正しい。
- ・p.12 5行目の Generation.s, a French political movement, は、原文では “Generation.s,” a French political movement, と記されていた。

# 総合問題 (英文) 早稲田大学 政治経済学部 4/4

## <大問分析>

番号	区分	出題分野・テーマ	コメント (設問内容・答案作成上のポイントなど)	難易度
II	読解総合	「majority judgement という投票方式」 (1,798 words)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・配点は100点満点中40点。文整序問題(問1)、語句の適語補充問題(問2、問5)、文挿入問題(問4)、表の読み取りに関する問題(問3、問7)、要旨選択問題(問6)、本文から派生する資料および表を用意して、その表の読み取りに関する問題が(問8)であった。大問Iを含む全体の時間配分にもよるが、目安として50分程度で解答することを考えると、難度は決して低くない。</li> <li>・英文中の表はすべて候補者に下された評価を表にしたものだったが、問8では有権者の下した評価が表にされていた。したがって、解答する際、候補者に下された評価に変換することがポイントであった。</li> <li>・問8の2(ii)で受験生が間違えるとすれば、指示文の日本語の不正確な理解によるものだろう。大問IIは英語の読解問題が中心になっているが、科目の表題通り、日本語及び数理的な理解をも必要とする「総合問題」であったと考えられる象徴的な一題だったと言える。</li> </ul>	標準
III	英作文	自由英作文 「子供の教育にとって 音楽と芸術は数学と語 学よりも重要度が低 い」という意見の是非 について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・配点は100点満点中15点。「1つのパラグラフで書くこと」「賛否の理由は少なくとも2つ挙げる」という指示があった。解答用紙のスペースから判断して、100~150語程度で書くことになるだろう。</li> <li>・Music and arts are of less importance for a child's education than math and languages. というテーマの賛否を問うものだった。条件にあった for a child's education 「子供の教育にとって」という観点からいづれが重要であるかを根拠立てて表現できるかが鍵を握っていた。</li> </ul>	やや易

注：区分は「英文解釈」「読解総合」「英作文」「文法・語法」「聞き取り」「その他」  
難易度は5段階「難・やや難・標準・やや易・易」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

## <学習対策>

大問IIは、1,000~2,000語近い分量の「超長文」を素材に、論旨を正確に把握する力が要求されている。大学入学後のいわゆる「超長文」素材を論旨把握中心に展開する講義形態を意識したものと考えられる。よって、1,500語程度の英文を数多く読み、内容を迅速かつ正確に把握できるように演習しておくこと。また、2023年度の設問形式は新テストになる前からの政治経済学部にて定番の設問形態と同じものが多かった。したがって、過去問や問題集を利用した学習対策は、やはり効果的である。そして、100語程度の自由英作文が出題されるので、いくつかテーマを決めて、平易な構文で、自分の言いたい内容が明確に伝わるように英文を書く練習を十分に積んでおく必要がある。